

46 脊髄損傷者の喫煙状況に関する調査

自立訓練部 機能訓練課 烏山美弥、弦間初美、道木恭子

1. 研究目的

喫煙による健康への影響は一般的に広く知られており、喫煙は全世界で第2位の死亡原因とされている¹⁾。しかし、当施設を利用している脊髄損傷者の中には、喫煙による健康被害について認識し、なおかつ痰がでにくいなどの症状を自覚しながらも喫煙している人がいる²⁾。また、入所前の入院期間中は禁煙していたにもかかわらず、入所後に喫煙を再開した人もいる。そこで、今回、健康への影響を認識していながらも、なぜ喫煙するのか、その理由を明らかにするため調査を実施した。

2. 研究方法

施設を利用している脊髄損傷者で喫煙している人を研究協力者とし、半構成的面接を行った。

3. 結果

1) 研究協力者の概要

障害名は頸髄損傷10名と胸髄損傷2名で平均年齢は28.8歳、受傷後平均経過年数は4年2ヶ月であった。全員男性であった。

2) 喫煙による身体的な変化

呼吸器症状については、受傷前に比べて肺活量の変化を自覚している人は9名で、「肺が1個になった感じ」「疲れやすい」などの症状を自覚していた。喫煙による全身の変化は、「ダイエット効果があった」「咳・痰が増加した」「少し太った」などであった。

3) 喫煙に対する思い

喫煙によって、「間をもたせている」「ストレスを解消する」「生活にメリハリをつける」「他の利用者と交流する」などの他、「タバコの害については知っているが、自分は大丈夫」、「やめるきっかけがつかめない」等の回答が得られた。

4) 禁煙していた人が喫煙を再開した理由

「喫煙所があるから」「まわりが吸っているから」「吸いやすい環境だから」「受傷後のストレスから」「自分で吸えるようになったから」などの回答が得られた。

4. 考察

喫煙によって、咳や痰が増加し、疲労感も強くなるなどの自覚症状がある反面、喫煙によるリラクゼーション効果が得られることや、喫煙所が他の利用者との大切な交流の場になっていること、また、自分で吸えるようになったことへの自信など本人にとってはポジティブな面もある。

しかし、脊髄損傷者にとって喫煙は肺合併症のリスクが高いことから、禁煙指導は重要である。よって、禁煙をすすめていくための今後の課題として、喫煙に頼らないリラクゼーション及びメンタル面での支援を検討していく必要がある。

引用文献

- 1) WHO 世界保健機関：2007年調査
- 2) 野田みゆき他：障害者支援施設を利用している頸髄損傷者の呼吸機能と喫煙に関する実態調査、日本リハビリテーション看護学会学術大会収録23回、107-109、2011